

2014年

美術検定

1 級記述式問題

■記述式問題は全4題です。それぞれの設問に従い、解答用紙に記述してください。

[短文記述問題]

以下の2つの事項について、それぞれ140字以内で解答してください。

【1】美術館の主要な機能を、4つに整理して説明してください。

【2】「アール・ブリュット」について説明してください。

問題は次ページに続きます。以下の余白はメモなど自由にお使いください。

[長文記述問題]

以下の2つの設問について、それぞれ500字以内で解答してください。

【3】あなたは、ある展覧会の一般来館者向け解説ボランティアとして、下図の作品解説を担当することになりました。あなたなどのような解説をしますか。以下 [A] ~ [C] の資料をバランスよく利用したうえで、解説内容を記述してください。また、来館者が現代の日本美術により興味を持つ手助けとなるような内容に構成してください。

[A]



(全図)



(部分拡大図1)



(部分拡大図2)

©YAMAGUCHI Akira, Courtesy Mizuma Art Gallery

[B] 作品の展示キャプションと作者略歴

[キャプション]

山口晃《百貨店圖 日本橋三越》2004年

紙にペン、水彩 59.4x84.1cm 株式会社三越蔵

《洛中洛外図》などの日本の伝統的な絵画スタイルをとり、古今東西さまざまな事象や風俗、現代の日常生活を、緻密な描法によって1つの画面上に再構成し、時間と空間を自由自在に混在させた機知に富んだ画風が特徴だ。この作品は、日本橋三越100周年新店オープン記念用原画として描かれた連作のうちの1作である。透視遠近法を使わず、消失点がない画面上では、さまざまな場面が同時に展開されている。江戸風俗の表現の中に現行の三越の包装紙デザインが紛れ込んでいたり、一見、建物の

断面図のような整然としてみえる空間がねじれていたり、みればみるほど発見が多い作品だろう。

[略歴]

1969年、東京都生まれ。1996年、東京藝術大学大学院美術研究科絵画専攻（油絵）修士課程修了。1997年に会田誠が企画したグループ展「こたつ派」をきっかけにその作風が注目を浴び始める。以降、現在に至るまで、各地の美術館やギャラリーでの個展、グループ展への出品が相次ぐ。また、立体、漫画、「山愚痴屋敷エンナーレ」と名づけた1人国際展のインスタレーションなど表現方法は多岐にわたる。さらに、書籍の挿絵や広告ポスター原画の制作も多い。

[C] 《百貨店圖 日本橋三越》に関する記事など

山口晃：大和絵とか浮世絵とか日本画とかってというのは知らない方からするとたぶん、区別がつかないと思うんですね。今からすると皆昔の日本のっていう、いっしょくたでそこにはハイとローって言うんですかね、高い文化と大衆とというのもあったでしょうし、規制もあり世代間の差もあるんですけども、それが過ぎてしまうと、ただ一つの日本の文化という括りで見られてしまう、気軽さと寂しさと危うさと、みたいなことをやっぱり込めていると思うのでしょうか。多少考証がいい加減とか、反対にその外形的なものを持ってきて軽さとか、そういうのも含めて、なるべく確信的に、であるんですけど全部を確信してないで、ある部分、現代人としての無自覚な、乱暴な搾取みたいなことを少し混ぜつつやっているような気でおりますが。(略) 考証を正確にすると多分、その時代のことなんだなっていうことで、現在いる自分たちが見ているという意識が消えてしまうと思うんですね。作りの丁寧な時代劇はむしろ危険であって、昔こうだったんだなと思ってしまいうんですけども、暴れん坊將軍みたいなのですと、本当にそうかって言う気がしてくる。(略) 結局見ているのは今から一秒もタイムスリップできない自分でしかない。

(岡部あおみ「山口晃インタビュー」、武蔵野美術大学芸術文化学科webサイト『Cultural Power』2003年10月22日)

日本橋三越を舞台に繰り広げられる人間ドラマ。洋服を着た現代人と、過去から来た和装の人々が、絵の中で出会い、当たり前のように買い物を楽しんでいる。(略)

山口は、近代化されていく日本と、その中で形を歪めながらも残っていく日本の文化を等価に眺め、絵の中で融合させていく。その細部にまで行き届く繊細な愛情が、形にリアリティを与え、ユーモアをまといながら、我々に今の日本の本質を鋭く突きつけてくるのだ。

(「人口密度、世界一? 山口晃が描いた日本橋三越」『月刊アートコレクター』2011年8月号、生活の友社、pp.30-31)

あるとき山口に「(略) 日本美術のビッグネームの作品に興味はないんですか?」と尋ねると、「興味はございますが、それ以上にあえて桃山や室町の名も知れずコツコツと絵を描いていた職業画家たちの風俗画や絵巻に惹かれるものがございます」と実に丁寧なお答え。偉大なる天才と作品を短絡的に結び付けがちな「ピジュツシガク」が実は西洋の御仕着せであり、日本美術の作品が本来持つ一人の個人に帰属しえない無名性と時代の共時性の本質を、この確信犯は見事に見抜いている。そして“正統な美術”なる概念さえが本来フィクションであり、実はどこにも帰属しえない捉えどころのないものであることを、彼は静かにしかし誠実な手業によって過激に主張しつづけるのだ。だから彼の作品の中では、やまと絵だけでなく、彼自身がリアルなものとして時代の中で享受しつづけたマンガの要素も、泰西名画も、ポンチ絵も、水墨画もすべて等質に還元されフラットに盛り込まれているのだ。

(千方可「山口晃作品にみる日本美術の特質—作品集刊行によせて」『UP』2004年11月号、東京大学出版会、p.30)

【4】あなたは、小学校6年生の授業で、以下の作品を題材にワークショップの講師を務めます。事前準備として、子どもたちに向けて作品解説を書くことになりました。資料[A]～[C]をバランスよく利用したうえで、わかりやすく解説してください。その際、子どもたちが自分のみたことに基づいて、十分に咀嚼しながら美術鑑賞ができるように構成してください。

[A]



[B] 作品の展示キャプションと作者略歴

[キャプション]

ディエゴ・ベラスケス 《ラス・メニーナス》 1656年頃
キャンヴァスに油彩 318x276cm プラド美術館蔵

スペインのフェリペ4世の宮廷画家としてベラスケスが描いた、大スケールの集団肖像画。王宮の一室を正確に記録した画面には、王女マルガリータを中心に、鏡に映った国王夫妻、作品の題名となった王女に仕える侍女たち、宮廷道化師(小人たち)やお気に入りの犬、修道女の服装をした腰元と護衛、侍従、さらには画家自身が描き込まれている。肖像画のモデルに飽きた王女を侍女たちがなだめているところに国王夫妻が入ってきた、という日常的な一瞬をとらえたスナップショットのようにもみえる。

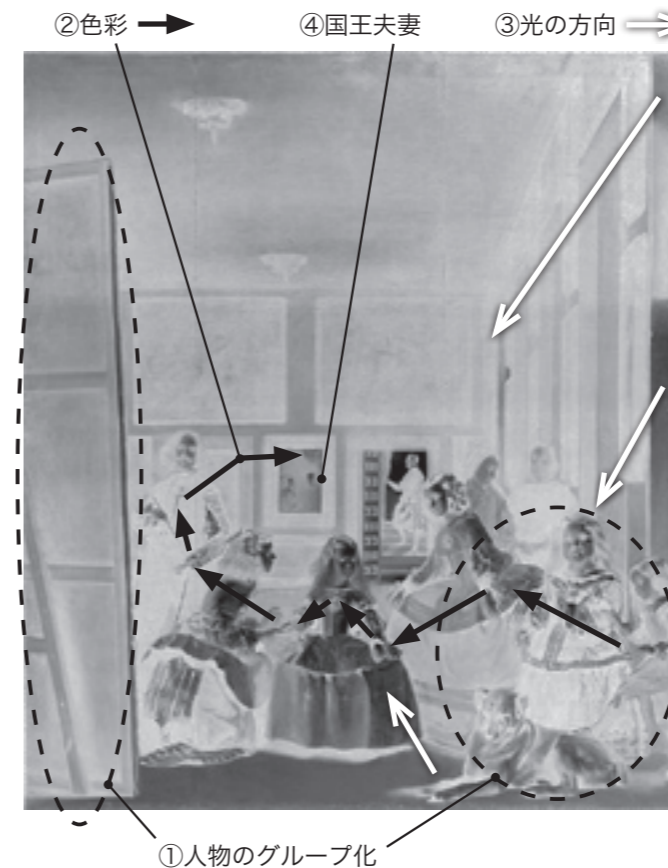
あるいは、モデルになっている国王夫妻を見物する王女たちにもみえる。そこには、画家とモデル、現実と虚構などを巧みに交錯させた画面構成、みる者の視線を導くアクセントカラーの配置、荒々しい筆触、光の効果などさまざまな仕掛けに富み、いまだに研究者や作家たちが多様な解釈を行う。また、ゴヤや印象派、ピカソら後世の画家たちが多くをこの1枚から学んでいる。

[略歴]

1599年生まれ、1660年没。バロック時代を代表するスペイン人の宮廷画家。卓越した描写力を持ち、のちの印象派を先取りした画家である。マネをはじめ後世の画家たちから「画家の中の画家」とも賞賛された。

[C] 《ラス・メニーナス》に関する資料

複数の人物が登場し、彼らをグループ化した構図は、慎重に考案されたもので、互いに完璧な均衡が保たれている。複数の焦点と色調の対比が、カンヴァス全体にわたって見る者の視線を前後に移動させる。鑑賞者は、まるで画中で進行中の動きに関わっているかのような感覚を得るのである。



①人物のグループ化

小人の侍従2人、犬、中景に描かれた3人の女性たちの間で均衡が保たれている。さらに、ベラスケスは左手に、護衛と修道女は右手に立っている。鏡に映った国王夫妻と、ドアのところにいる侍従の姿も全体のバランスを取っている。

②色彩

作品全体に、アクセントとして使われた赤が点在している。小人の2人(右下の部分)からジグザグの線を描き、鑑賞者の視線は王女のドレス、水差し、ベラスケスが手に持つパレット、そして最終的には鏡に映る赤のドレープへと導かれていく。

③光の方向

ベラスケスは王女を作品の中心とするために、窓から差しこむ光を使っている。王女は光の方へ身体を向けて立っている。作品は影になる部分が多いことから、光が当たった王女の顔とドレスが瞬時に鑑賞者の視線を引きつける。

④国王夫妻

背景の鏡にはフェリペ国王とマリアーナ王妃が描かれており、その位置は見る者と同じ地点だとも推測できる。しかし、この鏡は正面にあるものを直接映していないこと、鏡の中の国王夫妻のサイズや、2人が枠の中にきちんと収まっていることから、鑑賞者のいる場所とは一致しないことがわかる。

(アンドリュー・グレアム＝ディクソン監修、樺山紘一日本語版監修『世界の美術』河出書房新社、2009年、p.220より文章引用、図は参照のうえ改変)

— 禁無断転載 —

© 2014 美術検定実行委員会